
あたしは偽者王子様

深水晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたしは偽者王子様

【Nコード】

N0274C

【作者名】

深水晶

【あらすじ】

あたし高島怜子は中学一年、男じゃないけど女の子達のアイドル、偽物王子様。顔だけ男の兄明史が、あたしの大好きな親友・超絶美少女里中璃衣子を狙ってる？ちょっぴり危ないハチャメチャ学園コメディ。王子なヒロイン、顔だけ取り柄な兄、お嬢で毒舌女神な超絶美少女など。「命短し恋せよ少女」あたしは偽物王子様」の長編版。

第1話 変態兄（前書き）

たぶんガールズラブGLではない筈です。

第1話 変態兄

鏡の中に、惚れ惚れするような涼やかな目をした白皙紅顔の美少年がいる。

艶やかでサラサラな黒髪に、小柄だけれどすっきりとした小顔に、若枝のようなすんなりした長い手足。

太めながらも整った眉。

黒目がちなアーモンド型の目。

繊細で優美なラインを描く美しい鼻に、小さめの形の良い赤い唇。見る人によつては挑戦的・挑発的にも見える悪戯っぽい表情。

元氣系活発美少年としては、申し分ない。

ただし、公立中学の女子生徒の制服を着てさえいなければ。

なおかつここが女子トイレでなければ。

そんなあたしは偽者王子様。

男じゃないけど女の子達のアイドル、夢と希望。

中身も外見も男前、決して女の子を傷付けたり、幻滅させたりしない素敵な王子様。

……いや、もう、世の中色々間違ってる気がするけど。

あたし的にはこれが本物の男で他人だったら、間違いなく惚れるけど。

残念ながら、このどう見ても完璧な美少年は、あたし、たかしまさとし高島怜子
なのだ。

つくづく神様を恨む。

胸はペタンコでジュニアサイズ（つまりAカップ以下）。

身長は半端な百四十七センチ、体重三十二キロ。

中学一年生でこのスペックってどうよ？

ヤバくない？

骨盤ないしヒョロヒョロだし、顔はイイけど、少なくとも女には見えない。

なんか色々ヤバくない？

あたし、こんなので大丈夫？

ルーズソックスもハイソックスも似合わない。

キャミソールよりノーブラのタンクトップが良く似合う（制服着用時より男前度二割増し）。

ミュールやヒールより、スポーツシューズが似合ってしまう。

ネクタイ外してカッターシャツのボタン三つ目までゆるめていても、バリバリイケメン。

ピアスあけたら男前度三割以上増したとか噂されてるし？（嬉しくない）

トイレから出た途端に吹いてきた強風で乱れた前髪を掻き上げたなら、黄色い歓声がそこかしこで沸き上がる。

本当マジでヤバくない？

色々やたら終わってない？

だけど、爽やか笑顔辺りに振り撒き、カッコツケなアルト声で「見てた？　すごかったね、今の風」

なんて言っちゃうの。

途端に沸き起こるスタンディングオペレーション。

「きゃーっ、カッコイイーッ！」

「れー様あー！」

「素敵っ！」

気持ちには判りそうで判らない。

あたし、女なんですけど？

アイドルでも宝塚でもないんですけど？

ちなみに『れー』っていうのはあたしのあだ名。

さそこじゃどうも男っぽくないし、怜はれいって読めるから。

そんなあたしはバスケット部員。

勿論部活中はギャラリーがいっぱい。

男子部よりも女子部に女子の観衆多いって、本当あんたら情けないよー！

おかげで男共には男女呼ばわりされるし。
でなけりや『高島兄弟のナニがついてない方』だなんて下品な事をいうやつもたまにいる。

その場でそのナニに蹴りを入れて悶絶させたけど。

男前王子なあたしには、兄がいる。

クリソツ兄弟あるいはあたしの成長版だなんて言われる事もあるけど、冗談じゃない。

あんな変態と同列に扱われたくない。

顔は確かに標準以上。

それは認める。

仕方ない。

だけど、ヤツは穴さえあれば誰でも良い節操なし。

あたしが知る限り上は五十二歳、下は……ヤバ過ぎて言えない。

マジで最低、鬼畜で変態なスケベ野郎。

朝から晩まで暇さえあれば、女とメール、または逢い引き。

あれはデートなんかじゃない。

このケダモノめ。

「俺は愛に生きる男なんだ」

だなんてふざけんな。

一度死ね。

マジで死ね。

死んで二度と生き返るな。

いつそこの手で殺すべき？

あのクソバカ顔だけ性悪兄貴のせいで、友達なくすこと三回、迷惑すること四回、女を取られて逆上した男に絡まれること計六回、手を出された女の友達に取り囲まれること計八回などetc。

最近、ヤツはろくでもなさにも更に拍車をかけている。

「おゝ、いたいた、サトちゃん！」

ペタペタとわざと足音立てて歩いてくるパツキン頭逆立て男は、
もしかしくなくても我が兄、たかしまあきふみ高島明史、三年生。

あたしの目の前まで来るとニコツと笑う。

「ところで、サトちゃん。りいこちゃんは一緒じゃないの？」

あたしの旋風のごとき左ジャブが、兄の右頬をとらえ、ゆがませる。

「ぐおあつ！！ べふっ！！」

兄はイケメンにあるまじき悲鳴と共に、唾液その他を飛ばしながら、倒れ込んだ。

ふ、油断大敵というやつだ。

むしろ天罰？

「人の腹を踏みつけて、ポーズつけてカッコつけるのやめて？ サトちゃん。黒っぽい何かが見えるから」

「それはスパッツだ」

「あゝ、一瞬黒のパンティかと思って期待したのに」

「キサマ、何の期待だっ、この変態！！」

思わず怖気を感じて飛び退った。

エロ兄は頬を痛そうにさすりながら、むくりと起き上がる。

「もちろん冗談だよ。サトちゃんはカワイイけど実の妹の下着見て興奮しないし。てか俺はつきりサトちゃんが、黒の男物のボクサーパンツをはいてるのかと思って、別の意味でドキドキしちゃったよ？」

「なっ、てめ、この……！！」

「個人的にはビキニ系とかヒモパンが見てみたいなあ。サトちゃんには女物よりむしろ男物で。下手な男より似合いそうだし」

「キサマ……ッ！」

肩が、腕が、全身がフルフル震える。

マジぶっ殺す。

「冥土へ叩き送ってやる！」

渾身の右ストレートは、紙一重でかわされる。

「おっと、不意打ちならともかく、二度目はきかないよ？ 甘いな、サトちゃん」

余裕ぶったバカ兄の胸元に飛び込んで、みぞおち辺りに膝蹴りを叩き込んだ。

「グハボエブハッ！」

ちなみに三連打。外すと連発や防御が出来ないので、捨て身の一撃必殺か、とどめを刺す時の必殺技だ。もちろん右ストレートはバカ兄を騙すためのフェイントだ。

今更だが、くれぐれも真似をしてはいけない。下手をすれば人が死ぬ。

加減？ しているようでしていない。

説得力ないね。

ごめん。

「ふ、お下劣腐れ外道め」

決めのポーズをつけて、乱れた髪を掻き上げる。

途端に上がる黄色い歓声。

「きゃー、素敵っつ、れー様あ！」

「いやあん、きゃああああっつ、ビューティフルッ！」

「明史さんも素敵」

「カワイイ、アッキー！」

…… すいません。

今の兄のどこに、その皆様のツボまたは萌えポイントがあったんですか。

あたしには判りませんよ、ええ、マジで。

理解不能。

あれですか？

顔なんですか？

顔さえ良ければ、許されるの？

どんな変態・エロ発言も、痴態・醜態でさえ。

そんなものなの？

いや、マジで判らないったら！

理解したくもない。

「……マジで死ぬからやめて」

変態兄はそう呻いた。

「昇天させてやろうか？ もちろん拳で」

「勘弁して。そんなサービスいららないから」

兄はぼやいて、腹を押さえて起き上がる。

「回復力としぶとさは。キブリ並だな」

いつもの事ながら呆れてしまう。

「いや、普通死ぬから。マジで死ぬから。だからやめてよ、サトちゃん。いや、マジで」

兄は冷や汗浮かべながら、愛想笑いする。

「ここは一年のクラスしかないよ、変態兄」

「だから、サトちゃんとりいこちゃんに会いに来たんじゃないか、冷たいな」

へらつとした顔で言う兄を、思わず眉間に皺寄せ睨む。

「帰れ」

「やだよ。りいこちゃんの顔を見てない」

「すぐ失せる」

「だから、りいこちゃん……」

「消える」

そこへ、

「怜子？」

親友、里中璃衣子さとなかりいこが現れた。

「りいこちゃん！」

これまでゆるんでいたバカ兄の表情がカッコつけイケイケイケメ
ンモードにフルチェンジする。

途端に辺りに妖しげなオーラを漂わし、シャキッと立って、中身
を知らなければ騙されそうな極上ものの笑みを浮かべる。

「君に会いに来たんだ」

アンタ誰ですかとツツコミたくなる甘い声で。

「僕の愛を伝えに……！　ぐおぶあブゲラギャッ！」

背後からの膝蹴りが尻穴あたりにクリティカルヒット。
たぶん大事なところにも当たったと思う。

もはやまともな声も出なければ、起き上がることも出来ない痛烈な当たりだ。

ああ、気持ち悪い。

「怜子、大丈夫ですか？ 顔色が悪いですよ」

りいこが心配そうに声をかけてくれる。

ざまあみる、バカ兄。

りいこの眼中にアンタは入ってないんだ。

これに懲りたら、二度と姿を現すな。

「なんでもないよ、りいこ」

りいこは、根っからのお嬢様だ。

しかもこの上なく気高く美しい、この世に降臨した女神だ。

どんな状況下でも冷静沈着。

どんな不快な状況でも、決して感情を乱さず荒げず、しとやかに
穏やかに柔らかに。

時にバツサリ斬り落とす。

そんなりいこは、あたしの唯一の理解者、心許せる親友。
彼女の代わりになる人なんて皆無。

「あら、明史さんですか？」

りいこはふと気付いたという顔をする。

「遊びにいらしたんですか？」

パツと辺りに花が咲くような、周囲に後光が差すような、絶品笑
顔で穏やかに言う。

「うっん、違うよ。それより次の授業、移動しなくちゃね。早めに

行こう、りいこちゃん」

「良いんですの？」

首を傾げるりいこちゃんに、あたしはコクリと頷いた。

「うん、平気」

誰がエロ変態ケダモノ兄貴なんかになりいこを接触・紹介させるも

のか。

あろうことか、この無分別で無節操なバカ兄は、
『ねえ、サトちゃん。お兄ちゃん、りいこちゃんに一目惚れしちゃったんだ。そういうわけだから紹介して？』

などと言いやがったのだ。

悲しい事に、幼稚園から小学校、中学校と兄の乱行・行状を知る限り、兄の辞書には誠意がない。

愛もなければ、信念も信頼も信条もなく、節操なしで手当たり次第。

教師、OL、キャバ嬢、近所のおばさんから、同年代はもちろん乳幼児以外の年下も。

美醜は問わない、体型もこだわらない、性格も気にしない。

性別が女であれば、誰でもOK。

そんな見境ない男が一目惚れ？

『初めて見た時、ピンと来たんだ。俺の一生を捧げる女はこの人だつて。俺は彼女のためなら、死んでも良い。本望だ！』

もちろんあたしの返事は『ならば死ね』だ。

紹介なんて死んでもしない。

りいこをバカ兄の毒牙にかけるくらいなら、殺人罪すら厭わない。りいこはあたしのかけがえない友人なの。

過去に兄が後の始末もろくにできないくせに、あたしの友人その他に手を出して、その結果、あたしも周りも傷付き迷惑被って、中学入学前までに、あたしの友人は一人残らず姿を消した。

あたしの今の友人知人は、中学入学以降につちかった人脈だ。

だから、あたしの兄に対する恨みや憎しみは、正当なものだと思うし、あたしがそれを改めて欲しいと思うのは間違いじゃないはずだ。

だから、親友を守るために兄を殺す事も辞さない覚悟だ。

なるべくならば、本当に殺す前に諦めてくれると良いけど。

りいこは、あたしの心のオアシス、羨望、憧憬、女神だ。

煌めく世界の輝かしい太陽なのだ。

あたしはりいこが誰よりも好き。

誰にも何にも代えられない。

微笑まれるとうつとりする。

見つめられるとクラクラする。

これは友情、深い愛。

見返りを求めない神聖で清らかな気高く美しい友情なの。

もちろん恥ずかしいから、りいこも含めて誰にも言ったりしないけど。

あたしはりいこを守るためなら、鬼にもなる。

「何かありましたの？ 怜子」

心配そうにりいこが言う。

りいこは他の誰にも判らないあたしのちょっとした変化や異常にすぐ気付いてくれる。

あたしの本音を笑わず、否定せずに聞いてくれる。

「何かあったのならば話してください、怜子。黙っていても通じませんよ？」

りいこは優しい。

だからあたしはいつも甘えてしまう。

「心配かけてごめんね、りいこ」

あなたに会えて良かった、あたし。

だってりいこに心配そうに見つめられるだけで、こんなに幸せなもの。

だから、りいこに隠し事はできないの。

第1話 変態兄（後書き）

というわけで勢いで書いてしまいました。

どれだけ連載抱える気だとツツコミ入りそうですが。

あまり深読みしない方が良いかもです。

一応新キャラ登場を何人が予定していますが、たぶん次回では出せないと思われます。

進行によつては一名登場するかも知れませんが。

ノリツツコミで時折ボケ気味に書いています。

人はむやみに殴ったり蹴ったりしてはいけません（マジで）。

第2話 ジレンマと悩み

りいこは、あたしがこれまで見た中で、最高に美しい。

テレビや映画のアイドル・俳優なんて比較にならない。

その美しさはさることながら、存在感が、その言動が、辺りに振り撒く空気が違う。

全ての人の目を奪うというよりは、直視することに勇氣が必要そうならばゆさで、見つめてしまったなら、理性を総動員しなくては目をそらせない。

入学式の日、生徒玄関で靴を履きかえている時に、ふと顔を上げると、りいこが太陽の光を背景に、入口から中に入ろうとするとこるだった。

一瞬、世界の全ての音が消えた。

全身に電流が走るような痺れを覚えた。

彼女がふとあたしに気付き、不思議そうに首をゆっくり傾げた。

目が合った瞬間、彼女は穏やかに微笑んだ。

「初めまして。おはようございます」

彼女がお辞儀をすると、長いストレートの黒髪が、さらりと肩からこぼれ落ちた。

彼女は顔を上げると、照れたように微笑みながら、落ちてしまった髪を掻き上げ、背中側に流した。

その絵画のような、叙情的な映画のワンシーンのような光景を、息を詰めて呆然と見つめてしまい、戸惑うような視線を向けられ、初めて我に返り、動揺した。

たぶん真っ赤になっていたと思う。

「ご、ごめん。あんまりキレイだったから。その、見惚れちゃって」と言わなくても良い事を口走ってしまって、更に慌てた。

「あ、いや、変な意味じゃなくて！　そ、その思わず感動して！！」
言ってからこれじゃただの変態だと思い、更に泡を食ってしまう。

「あなたみたいな美少女初めて見たから！ め、免疫なくて！！」
言ってる途中で、なんてバカなこと言ってるんだ、こんな美少女に軽蔑されたら、気まずくてもう学校来られないと思って、激しく焦った。

だけど明らかに挙動不審でテンパってるあたしに、彼女はにっこり極上の笑顔を向けて、

「私こそ、あなたのようなきれいな女の子に、初めてお会いしましたわ」

と、おっとりはんまり口調で言われた。

その言葉に、あたしはひどく動揺した。

「あ、あたしが女の子って判るの？」

そう尋ねたら、彼女は優美に頷いた。

「一目で判りますよ。何処からどう見ても女の子じゃないですか」
当たり前だと言わんばかりに。

そんな事を言われたのは初めてだった。

あたしは感動した。

初めていいこの姿を見た時以上に感動した。

「あたし、高島怜子っていうの」

興奮して饒舌になっていた。

「私は里中璃衣子です」

その瞬間、あたしは彼女と友達になると心に決めた。

友情は同意や共感があつて、初めて成立するものだけど、とにかく彼女と親しくなりたかった。

幸いなことに、それはあたしの一方的な思いではなかったらしくて、

「よろしかったら、お友達になっていただけませんか？」

と、彼女の方から言ってくれた。

私は即座に頷いた。

「あたしこそ。あなたと友達になりたい」

後にも先にも、あんなに強く、誰かと親しくなりたかった事

はなかった気がする。

あたし達は、幸せなことにほぼ同時に、相手と仲良くなりたいと思った。

クラス編成を確認して、同じクラスだと知った時は、飛び上がりたくなるほど嬉しかった。

あたし、普段はそういうキャラじゃないのに、嬉しくて抱きついてしまった。

りいこは怒ったりしなかった。

代わりに子供にするように優しく頭を撫でてくれて、

「はしゃぎすぎですよ。確かに私も嬉しいですけど」

と言ってくれた。

思わず頬にキスしたい衝動に駆られたけど、なんとかこらえた。

女の子を傷付けたり悲しませたりしたくない。

りいこのような子ならば、尚更だ。

嫌われるか否か以前の問題だ。

りいこは小さな淑女で大人だ。

あたしはそれに比べて落ち着きがない。

気が利かない。

短気で直情的で感情的で、すぐ突っ走る。

口と手が同時に出る。

乱暴で単純で、おだてに弱いお調子者。

売られたケンカは断然買っし、挑発されたらすぐに乗る。

キレたら手加減しないし、暴走するし、後先なんか考えない。

男女と正面切って言われたら、たとえそれが事実に見えなくたって、黙っていいない。

だってそう言う連中は、事実を指摘したいわけじゃなくて、あたしを傷付けたり、ケンカを売るのが目的だ。

そういう連中に遠慮してやる理性や自制心なんてない。

やると決めたら、徹底的にやる。

売られたケンカに躊躇も遠慮もしない。

あたしは、自分より弱い相手にしかケンカ売れないような情けない連中が大嫌いだ。

正義漢？

義侠心？

そんなのどうだって良い。

あたしはやりたい事をやりたいようにやるだけ。

他人の価値観・思惑なんかどうだって良い。

優しい良い人だなんて思われなくて結構だし、ガサツで乱暴で無神経と言われても気にしない。

判って欲しい人が理解してくれるなら、それ以外はどうだって良い。

女の子を守りたいっていうのは、あたしのエゴだ。
単なる趣味。

別に好かれないからそうするわけじゃない。

ただの自己満足。

時折、もっと小さくて可愛い女の子に生まれたかったと思う。

でなければ、いつそ身長百七十センチ以上の長身になりたかった。

そしたらかなり等身高いモデル体型になれたのに。

何だか中途半端だ。

男にはなれないし、女にもなりきれない。

だからといって無性別にも中性にもなれないわけで。

基本女思考なくせに可愛い女の子に頼られると、半端ながらも王子様になる。

本当は嫌なことでも

「まかせな！」とか言って無理しちゃうし、少々腹が立ったり苛立ちを覚えても頼られると

「仕方ないなあ」なんて庇ってあげちゃう。

たぶん都合の良い時だけの王子様扱いなんだけど、それも判った上で期待に応えて、演じちゃう。

受け狙いとか媚売ってるとかじゃなくて。

メリットなんかまるでないけど、何となく女の子の夢は壊しちゃいけないような気がして、それが義務で責任みたいな気がして『みんなの王子様』を演じてる。

兄貴なんか見てると判る。

男が全てそうだとまでは言わないけど、あたし達くらいの年代の男共は、恋より愛よりエッチな事がしたい。

その点、あたしみたいな性別女でレズっ気皆無な偽王子なら、害はない。

恋に憧れつつも、本物の男は恐い、本気で傷付きたくない女の子達が、きゃーきゃー騒げる身近な距離の偽王子なら、いくら近付いても、危険な目には遭わない。

疑似恋愛には持つてこいだ。

たまに疑似と本物が区別つかないのか、本当にレズなのか、本気で迫ってくる子もいる。

だけど私は長年見てきて判っている。

本当に女の子が好きな女は、あたしみたいな偽者に声をかけたりしないのだ。

たまに女の子に体を触られたり、キスされたりする。

基本的には拒まない。

だけど最後の一線だけは絶対に越えない。

さすがにあたしにだって、ロストバージンには夢があるのだ。

本気で好きでもない子としようとは思えない。

だから服の上から触らせるけど、直には触らせないし、服も脱がない。

だけど、時折やたら気持ち良くて、困ってしまう。

ディープなキスは特にヤバイ。

っていうか、処女で初恋もまだで、男と付き合った事もなく、真性レズでもないのにあたしヤバくない？

りいこはそんなあたしの悩みやジレンマを、ガチで聞いて相談に乗ってくれる心許せる友人だ。

あたしにとって最大の敵は、実の兄だ。

兄は全くあたしを敵だと思っていない。

それどころか最大の理解者かつ協力者だと勘違いしているように見える。

兄はあたしに甘えすぎだ。

あたし以外の女の子達にも甘えすぎ。

自分が好かれて当然だと思ってる。

愛されて当然だと勘違いしている。

あたしがどれだけ罵倒しようと、足蹴にしようと、少しもこたえていないのは、ヤツがあたしが本気だという事を理解していないからだ。

あたしと兄の間には、絶望的なまでの断崖絶壁、あるいは長大で深い谷間がある。

言葉や暴力で説得できるようなレベルじゃない。

同じ両親、同じ家庭、似たような環境下で暮らしたはずのあたしと兄は、顔や姿は多少似ていても、中身は別物、違う星の住人だ。

あたしが偽王子になったのは、あたしの容姿がそれっぽかったというのも理由の一つだ。

だけどあたしが、その役割を楽しんでいるわけでもないのに、皆の理想に近付き、期待に応えようとするのは、兄が最大の要因だ。

あんな最低最悪変態男を、だれかの夢や理想の基準にしたくない。他の誰にもできないなら、あたしがやってやる。

この世で兄を、躊躇も遠慮もなく叩き伏せられる人間がいるとしたら、それは妹であるあたしだけだ。

あたしは兄より後に生まれたけれど、あたしと兄は対等だと思っている。

齒に衣着せず物を言える。

遠慮なく殴れる。

誰も兄を止めてくれないのなら、身内のあたしが始末つけてやる。それについては、責任感や義務感じゃない。

そんなに親切でも、博愛でもない。

あたしはだらしのない兄が大嫌いだけど、実のところ兄の全てを憎んでいるわけじゃない。

嫌いになれるものなら、嫌いになりたい。

その方が楽だ。

だけど兄は、ひどく最低なろくでなくせに、昔からあたしに對しては無条件に優しく、かつまた遠慮なく甘えてくるのだ。

そういうところも、たまに首を絞めてやりたいくらい、腹が立つのだけ。

どれだけ突き放し、乱暴しても、兄の笑顔と態度は変わらない。ものすごくふざけた言動で、しばしばあたしをからかったりするのに、『サトちゃん』と呼ぶ甘えた声色やリラックスした調子は、ずっと子供の頃から変わらない。

目を瞑れば、昨日の事のように、兄と泥んこになって遊んでいた頃を思い出す。

決して家庭に問題があったわけじゃない。

兄の心を傷付けるような事件や事故があったわけでもないと思う。兄が公園の砂場遊びに対するような無邪気さ・無造作さで、女性を扱うようになったのがいつからなのか、あたしは知らない。

たぶん最初は、それほどおっぴらではなかったのだ。

あたしが最初に気付いたのは、兄と一緒に通っていたピアノ教室だ。

それは個人宅で行われているものだった。

先生は音大出で、いわゆるバツイチで、二人の子供がいたけど、近所で評判の美人だった。

ある日、途中でトイレに行つて、水を流し忘れて出てきた時に、兄と先生がキスをしていた。

あたしはその場は見なかったふりをした。

あたしが小学四年、兄が小学六年の時だ。

翌週あたしは行きたくないと駄々をこねて休んだ。

その後は二度と行かなかった。

兄は困ったように笑っていた。

腹が立ったから、思いきり引っ掻いた。

その後、あたしは兄と一緒に行っていた習い事を全てやめた。

兄は続けた。

だけど、中学二年の夏休み直前までに、どれもサボるようになって、それでやめた。

あたしは時折思う。

あれを最初に告げ口していたら、今頃どうなっていたらろうかと。

兄は何も言わない。

説明しない。

弁解もしない。

あたしが何を言ってもしても、ヘラヘラ笑っている。

あたしはそんな兄が嫌いだ。

「あのね、ごめんね」

あたしはいいこに謝った。

「……バカ兄が、いいこを狙ってるの」

言いたくはないが、言わざるを得ない。

親友のいいこだけは絶対に、守りたい。

それが自分のエゴだと判っている。

だけど、そうせずにはいられない。

いいこを守るためなら、兄をも殺す。

他に方法がなければそうする。

「だけどいいこは、あたしが全力で守る。遭遇したらすぐ逃げて。あたしがそばにいなかったら、助けを求めて。なるべく一緒にいるし、離れていてもすぐ駆け付けるから」

そう言くと、いいこは鈴の音が鳴るような声で、しとやかに笑った。

「ふふ、怜子ったら。実のお兄様をまるで野獣か猛獣のように言うなんて」

「あれは猛獣よりも質が悪いの」
間違いなく、確実に。

「だけど、そんなに心配いりませんわ。明史さんは人間としては興味深いところもおありだと思いますけど、異性としては全く問題外ですから」

「あたしとiriiこの友情のためにも、あいつは取り除かねばならない害虫なの。油断しちゃ駄目よ、iriiこ。あいつには、良識も常識も通じないんだから」

言葉が通じないだけなら野獣レベル。

「だけど、言動・思考の理解や予測すら不可能ならば、異星人レベルだ。」

「判ったわ。そこまで怜子が言うなら、気をつけますわ」
iriiこはニツコリ笑った。

あのバカ兄は、本当に油断ならないのだ。

一度や二度くらい、そっけなくされても凹まない。

叩かれても、蹴られても立ち上がる。

集中力を切らしたら、またはあまりのしつこさに諦めてしまったら、勢いに乗って攻め立てる。

兄は一応イケメンだが、フラレたりつれなくされるのにも慣れてる。

兄はバカだから、押して駄目なら引く戦法は取らない。

押して駄目なら、ドアが壊れるまでとことん押しまくる。

人の迷惑など省みない。

人の心情など気にしない。

兄が何を考えているかなんて、想像すらしたくない。

判っているのは、兄がエロでバカで変態なこと。

欲しいものが手に入るまでは決して諦めないこと。

目的のためには、手段を選ばないこと。

女の子に暴力を振るう事はしないし、冷たく突き放したりもしないが、優しくはないし、氣遣わない。

表面的に優しくはするだろう。

だけどそれに心がこもっていない。

手に入ってしまうと、途端に熱が冷めるのだ。

相手が激しく拒めば、必死で抵抗すれば、さすがの兄も諦める。

だけどあたしが知る限り、兄に狙われてちゃんと抵抗できて、何もされずに逃げる事ができた人は全くないわけではないが、非常に少ないのだ。

なのに、兄は彼女達に親切にしない。

だから、あたしは兄を許せない。

あたしは正直、兄を恨みたくないし、憎んみたくない。

他の誰かにそうされるのも本当は嫌だ。

だけど、兄の所業は許せない。

憎まれても、恨まれても、仕方ない。

そのとばっちりをあたしがこうむっても仕方ない。

だけど納得しないし、許容しない。

あたしは兄の最大のライバルとなって、兄を阻み、その専横を懲らしめ、反省させてやりたい。

その日が来るまでは、偽者の、上っ面の王子様の仮面をかぶり続ける。

あたしは本物の王子様にはなれないけれど、偽者だったら十分やれる。

やれるはず。

だって言っちゃなんだけど、性別無視さえすれば、あたしはかなりのイケメンだし？

女の子の考えるような事は、だいたい想像つく。

あの変態兄に惚れたりする気持ちだけは、理解し難いけど。

だって、あんなの本当、顔はともかく他は最低、ただのエロ変態。しかもそれを隠すどころか、おおっぴらに見せるし。

なんなの、あのエロバカキャラは。

変態な言動、多すぎだし。

ヒモパン・ビキニはくなら自分ではけ！

見たくはないけど。

あたしは兄貴の下着なんか想像したくもない。

あのバカ兄は、いったい何を考えてるの。

だいたい妹のスカートの中なんか覗き込むな。

スパッツはいてなきゃ見えちゃうじゃない。

毎日はいてるから、ガード(?)は万全だけど。

公衆の面前で言及するなんて、本気で頭がおかしいのか、バカ変態兄。

思い出したら、ますます腹が立ってきた。

今日は帰ったら、夕飯前の軽い運動に、兄をしめよう。
そうしよう。

第2話 ジレンマと悩み（後書き）

なんだか今回、コメディよりも真面目寄りかも。
次回はコメディです。

第3話 宣戦布告

りいこは習い事が忙しいため、部活動はしていない。

また送迎は車だから、登下校時に兄が接触する際はほとんどない筈だ。

従って、放課後は安心して部活に専念できる。

部活は下はジャージ、上はTシャツで行う。

試合形式の練習や暑い時はジャージを脱いで短パン姿になる。

最初の柔軟、ランニングは大抵ジャージ。

ちなみに男前度は、スカート脱いだ分、少し上がる。

女子バスケット部のギャラリィは、体育館外にまであふれている。

一年生だけでなく二年、三年もいる。

女子マネは三人。

高い倍率だったが、選考の際に『経験者であること』という条件がついて、現在の人数になった。

入学したてのホヤホヤだ。

今のところ、新人戦でレギュラーとして使って貰えるか不明だ。

一応ベンチ入りには抜擢されたけど。

ポジションはガード。

太りにくい体質で、小柄で当たり弱いあたしの武器は、スピードだ。

それとフェイント。

対峙する相手の心理を正確に読み取り、自身のものは隠し騙す。

ノールックパス——相手を見ずにパスする——とスティール——

敵からボールを奪う——とロングパスとシュートは人一倍練習した。

少しでも体力をつけようと、朝はランニングを欠かさない。

残念ながら見た目に派手な武器は持っていない。

だけどあたしのステップは、なかなかのものだと思う。

ダンクシュートはできなくても、シュートの精度が高ければ問題

ない。

派手だし、成功すれば盛り上がるだろうけど、中学生でできる人はほとんどいないと思う。

実はバカ兄は意外とジャンプ力があって小器用で、ダンクシュートができる。

ただし、制限区域内にマッチアップする相手がいない時限定で。全く使えない男だ。

基本的に、あたしは敵の隙を突いてボールを奪ったり運んだり、アシストするのが主で、ポイントゲッターになることはほとんどない。

だけどあたしは身体を動かす事が好きだ。

敵を騙して翻弄し、スティールを成功させたり、味方に上手くボールを繋げてシュートが入った時は、快感だ。

兄と同じ身長——百七十二センチ——があれば、もっと良かったのかなと思う事もある。

だけど兄の得意な事と、あたしの得意な事は全然違う。

兄は何でもチョロチョロ手を出すわりに、どれもこれも中途半端だ。

たぶんオールマイティーなのだが、特筆すべきものは何もない。

だから、尊敬などはとてもできない。

何が楽しくて生きてるんだと時折思う。

少なくともエロと女は兄の生き甲斐なのだろうと思うけど。

「なんでいるの、エロ変態兄」

部活から帰宅すると、兄がリビングのソファに寝そべり、アニメ番組を横目に、女性週刊誌を読んでいた。

この場合、エロ系でないことを喜ぶべきだろうか。
微妙だ。

「今日はデートとかメールしないの？」

そう言つと、兄は雑誌をぱらりとめくりながら、

「しない。全員切った」

「……へ？」

きよんとした。

「だからさ、マジで一目惚れなんだって」

兄はだらけた姿のまま、のんびり言つた。

「どういう意味」

「だから、りいこちゃん」

そう言つて、雑誌を閉じてテーブルに置くと、起き上がった。

「一昨日、初めて図書室で見たんだよ」

「え！？」

驚いた。

「惚れたからすぐに口説いたんだけどさ」

知らない。

聞いてない。

何よ、それ。

「それがまた、ニツコリ笑つてこつ言われたんだ」

曰く、

『あなたは『平成の光源氏』『在原業平の現代版』などと噂されているとお聞きいたしておりましたが、実際お目にかかる、案外普通で平凡な方なのです』

兄はどうやらこの台詞に衝撃を覚えたらしい。

絶句してしまったとのこと。

『非常に興味深い方だとは思いますが、謹んでお断りいたします。他に用件がなければ、これで失礼させていただきます。では』

そう言つて、呆然と立ち尽くす兄をその場に残し、りいこは立ち去つたらしい。

「色々聞いて回つたら、サトちゃんの親友だつて言うし。サトちゃん経由ならもつとちゃんと話せるかなつて」
つまり。

「近付く事や遭遇する事すら困難なんだ。さすがの俺も、近寄れないんじゃないし」

苦笑しながら言う。

「だからってあたしが協力すると思ったら、大間違いよ!」
あたしは悔しかった。

兄と既に遭遇している事をりいこは話してくれなかった。
言いかた、断り方は、さすがりいこだ。

この兄にとって『普通』『平凡』と言われた事は、きっとかなりショックだったに違いない。

「いや、ますます惚れるよな、あのクールビューティ」
違う。りいこはどちらかといえばツンデレだ。

厳密には違うかもしれないが。

「いや、本当に歩き方も颯爽としていて、それでいてしとやかで。正に理想? 究極の大和撫子? 女らしくて凛としていて、筋が通っていて痛快だし。彼女にならムチ打たれても、目隠しされて縛られても良い。たぶん隠れSだと俺は思っただけど、どう?」

じゃあ、あんたはMか、このクソ変態!

怒鳴りつけたくなるが、ここは我慢。

「……で? 他に何かあったの?」

「何も。ニアミスすらない。ようやく話しかけられそうだったのに、サトちゃんが邪魔するから、機会逃しちゃったし。せめて写真が欲しいよ。切ないよ。ねえ、サトちゃん、何か写真譲って? 顔のアップでもプリクラでもパンチラでも」

「……殺すぞ」

襟首掴んで言うと、兄は謝った。

「ゴメンナサイ。でもマジで写真はください。お願いします」

「やだ」

キッパリ言った。

「ね?」

「絶対やだ。渡さない」

兄はしょんぼりした顔をする。

「どうしてもダメ？」

「ダメに決まってるでしょ！」

あたしは睨んだ。

「なんで？」

兄は不思議そうな顔をする。

「なんでそんなに嫌がるの？ サトちゃん、そんなに怒って拒否したこと、今までなかったじゃない」

「今までだって、あたしの友達には絶対手を出さなって言ってきたでしょ！？ あんたの目と耳は節穴か！！」

「怒ってたけど、そんな恐い目で睨まれたりしなかったよ？」

兄は言って、ハツと顔の表情を強張らせる。

「ハツ、もしかサトちゃんも、りいこちゃんの事を！？ もしや実の兄妹で三角関係！？ もしやサトちゃんとりいこちゃんって百合な関係！？ 恋人なの！？」

「下世話な想像すんなっ！！」

殴ろうとしたが予測されていたのか、かわされた。

腕を取られて、床の上に引き倒される。

頭を打つ直前に、抱き止められた。

「危ないよ？」

「……誰のせいだと思ってるの」

「この距離だとキスできるね、サトちゃん」

鳥肌が立つのと同時に顔面殴った。

「ぶへぼっ！」

直撃したが、離してくれない。

「へ、変態！！」

あたしは怒鳴り、暴れ、引つ掻き、噛みついた。

「痛い、痛い、痛いよ、サトちゃん。冗談、本当に冗談、軽い冗談だから落ち着いて！」

「落ち着けるか、このド変態！！！」

最悪だ。

本気だろうと冗談だろうと、最悪だ。
最低だ。

「はいはい、変態は離れるから暴れるのやめてよ？　じゃないと離せないからね」

「な、何を考えてるのよつ、この変態！」

「ん？　少なくとも、りいこちゃんとそういう関係じゃないのは、良く判った。さすがに妹と女の子を取り合いするのは、シャレにならないし」

「……へ？」

言われた意味が良く判らなかった。

床の上に座るように、解放された。

「サトちゃんが恋敵じゃないなら、安心だし。これで心おきなく腰を据えて、りいこちゃんを口説ける」

「……変態兄」

あたしは睨んだ。

「はい？」

兄はきよとんと首を傾げた。

「りいこはダメ」

「え」

兄は一瞬固まった。

「手を出したりしたら、本気で殺す。手加減なしにマジ殺す」

「え……な？　ちょ、ちよつとサトちゃん、顔が怖い……」

「バカ変態エロスケベ兄には、指一本触れさせない。あたしの目が黒い内は絶対に守る。じゃなきゃあたしは、自分が許せない」

「もしもし、サトちゃん？」

兄は顔を引き攣らせ、声を僅かに震わせた。

「あたしはりいこのためなら、鬼にも蛇にもなれる」

「……………」

兄は珍しく真顔になって、眉をひそめた。

「あたしに殺されなければ、諦めなさい」

あたしが言うと、兄は柔らかく微笑んだ。

「そう言われて諦めるくらいなら、一昨日つれなくされたところで諦めてる」

優しく穏やかな口調だった。

「だって俺、マゾじゃないし？」

……この変態。

「死ね！ 今すぐ死んでよ！ エロ変態！！」

掴みかかったけど、また腕を取られた。

今度は両手。

「やだなあ、サトちゃん。男は全員エロ変態よ？ エロは男のロマ
ンだから」

兄はヘラヘラ笑いながら言う。

「ふざけんな！」

ガシガシゲシゲシ膝下辺りを蹴りまくる。

「痛いって。もう、乱暴だな。そういうところも可愛いけど」

怖気が走る。

「可愛いとか言うな！ 変態が！！」

泣きたくなる。

「……あのさ、サトちゃん」

兄は余裕ぶった笑顔で言う。

「俺はサトちゃん好きだし、生意気なところも全部含めて可愛いし、
多少の我儘なら聞いてあげたいと思ってるけど、これだけは別。譲
れない」

「バカ兄、嫌い！ 離してよ！！」

叫ぶと、兄は苦笑した。

「どうしてもサトちゃんが邪魔するって言うなら、俺も本気出すけ
どそれでも良いの？」

優しい口調と笑顔なのに、何故か怖かった。

「いいこだけは絶対ダメ！！」

だけど、あたしは悲鳴のように叫んだ。

すると兄は、あたしを解放して、ニツコリ笑う。

「そう。じゃあ、俺は手加減なしで全力で行くから」

バカ兄が。

変態兄が、エロ兄が。

そう言って、切長の静かで涼やかな目で、あたしをじっと見下ろした。

何かがおかしい。

「……変態兄」

呟くと、ヒュツと風のような音と共に、兄の右拳が、飛んできた。慌てたが、紙一重でよけることに成功した。

兄は笑った。

「今度からは、それ禁止ね？」

あたしは兄を睨み付けた。

「バカ兄」

「……だから」

兄は笑う。

「そういうの全般禁止だつてば」

手加減なしのジャブが、頬をかすめた。

かすめた程度なのに、灼熱のような痛みが走って、肝が冷える。

「あ、やっぱ無理か。痛かった？」

兄がヘラリと顔をゆるめて笑った。

「……なんで」

泣きそうになった。

「ん？ いや、俺が本気だつてこと、サトちゃんに判って貰おうと思つて。怖かった？」

兄はニツコリ笑った。

「サトちゃんならキツチリ避けてくれると思つただけだね。本当、ごめん。やっぱり顔はまずいよな」

兄が不意に、得体の知れない生き物に見えた。

「もしかして脅えてる？」

兄は不思議そうに首を傾げた。

「だ、誰が……っ！」

睨みつけると、兄は笑った。

「ごめんね？ ……だけど」

真顔になった。

「本気なんだ」

宣戦布告だった。

第3話 宣戦布告（後書き）

コメディになりませんでした。

何故だろう……。

いえ、原因判っていますが。

兄と妹の攻防を書くのは楽しいです。

何だか兄の鬼畜度が増している気がします（おかしい）。

第4話 朝の風景

ああ、悪い夢であって欲しい。

一晚経つたら、何もかもキレイサッパリなくなっていてくれたら良いのに。

もちろん変態兄ごとキレイサッパリ、スツキリと。

それはともかく、あたしの朝は早い。

五時五分には起床する。

何故五時ではないかというと、五分余計に寝ると得した気分だから——ではなく、あたしが使っている目覚まし時計が、五分遅れているからだ。

その内直そうと思いながら、そのままだ。

目覚まし時計って結局、夜寝る時と、朝起きる時くらいしかまともに見ないんだけど、そんなに長くじっくり眺める事もないのよね。たいていは携帯の時刻を確認するし。

だからつい、忘れちゃう。

パジャマを脱ぎ捨て、Ｔシャツとランニング用のジャージを着て、台所でコップ一杯の水を飲んで、腹筋・背筋・柔軟・スクワットを各百セットこなしてから、走りに行く。

七時を回ると結構車通りが増えるが、この時間では配送の車くらいしかめつたに見かけない。

朝の空気は好きだ。

誰もいないと特に最高。

その上、晴れていると嬉しくなる。

近所に花がきれいな庭がある。

天気が良い日に近くを通りかかると、花の匂いが香ったりする。

昨夜、いいこにメールを送った。

いつもおやすみメールは送っているのだが、それとは別に兄貴のことを聞いたのだ。

『ええ。確かにお会いしました』

やはり、シヨックだった。

何故りいこは教えてくれなかったのだろう。

直接電話し、尋ねたら教えてくれた。

『すっかり忘れていましたわ』

確かにりいこにとつて男に告白されたり、口説かれるのは、珍しい事じゃない。

それも一人二人ではないから、忘れてしまっても仕方ない。

だけど、兄貴は？

確かにエロで変態でバカで、色々問題ありすぎだが、一応顔だけはかなりの色男だ。

『顔やその他に過剰な自信を抱いている方は、然程珍しくありませんし』

まあ、そうだ。

そうなんだけど。

だけど、ヤツはあたしの実の兄だ。

『本当に平凡で、面白味に欠けてらっしゃいましたもの』

りいこが言うには、光源氏も在原業平も、架空・実在の違いはあつても、共に趣味人であり粋なのだと言う。

だが、兄の口説き方は、通り一辺倒で何処か聞き覚えのある使い古された、独創性も個性も感じない、つまらない文言だったと言う。『センスの欠片もない上に、心がまるで感じられなかったのです。

これほど空虚で退屈でつまらないものはありませんわ。私、途中で欠伸を噛み殺すのに苦労いたしました』

だから、すぐ忘れてしまったのだという。

『いくら上辺だけ美しく装っても、中身の伴わない薄っぺらな言葉など無意味です。シヨウウィンドウに飾られた蠟細工の見本ほどの役にも立ちません。とても怜子のお兄様とは思えぬ無個性ぶりでした』

りいこは辛辣だ。

そして本質を突いていると思う。

確かに兄には誠意がない。

口ばかり饒舌で、真意が見えない。

ふざけた男だ。

それを一目で見抜くなんて、りいこはすごい。

『どのような言葉であれ、それが本人の意図や意思を伝えるものであるというならば、その言葉には魂がなくてはならないと思います。判りやすく言えば、言葉や表現が美しければ良いのではなく、心情と内面を表しているものでなければ、意味がないという事です』

同感だ。

中身が伴わないから、兄の言葉はノリは良くとも薄っぺらだ。

『その点、怜子は自分を偽り、演技をしている時ですら、真摯で一生懸命ですから』

りいこは優しい。

『私はそんな真面目で、一生懸命頑張っている怜子が、大好きです』
思い出ただけで、ほわわわんと顔が緩んでしまうあたしは、変態だろうか。

これはあくまで友情のはずだ。

兄の邪魔をするのは、親友を守るため。

いやいや本当に友情か？なんて心の声が聞こえないではないけれど。

あたしは、バカ兄みたいな非道な行いはしないのだ。

あたしとバカ兄は、天と地ほどに違うのだ。

あたしはりいこに何も望まない。

今以上のものなど望まない。

だってあたしはこの上なく幸せなのだ。

後にも先にも、りいこのようにあたしを理解して、そばにいてくれる人は存在しない。

りいこみたいな完璧な女の子は、何処にもいない。

りいこはお嬢様だ。創業七十年の和菓子屋の娘で、二歳下の弟が

いる。

子供の頃から、日舞と茶道と華道と書道と琴とピアノを習っていて、最近琴と書道をやめたらしい。

彼女は市内の女子短期大学に進学後、婚約者と結婚することが既に決まっている。

それって嫌じゃないのと聞いてみた事がある。

先の先の人生までが既に親によって決められているだなんて、あたしだったら我慢しない。

我慢できない。

だけどいいこは笑っていった。

『もちろん私は、私の人生・青春を大いに楽しめますわ。私なりのやり方で』

それから少しだけ悪戯っぽい顔になって、

『それに、親が望む通りの人生を、子がまっとうするとは限りません。彼らと子供は、別人格で別の意思を持つのですから。期待されているからといって、それに応えてあげたいと思うほどの自己犠牲も博愛精神も、私にはございませんから』

黒い瞳がキラキラ美しく燦然と輝き、人形のように整った唇に血色が増して赤みを増す。

雪のように白い肌は薔薇色に輝き、気高く神々しい気品に満ち溢れた笑顔は、見る者の心を問答無用で、わし掴みにする。

その姿は、まさに女神降臨。

文句を言えるものなら言ってみろ。

逆らせるものなら逆らってみろ。

決して強硬ではなく、強制でもない。

むしろ柔らかく穏和でおっとりはんなりしとやか口調。

なのに、思わずひれ伏したくなるこのまばゆさと恍惚・陶醉感。

まいりましたと両手を上げて、降参したくなる。

キレイなのにカッコイイ。

あたしの女神。

素敵なりいこ。

あなたのためなら、何でもしてあげたい。

りいこは決して声を荒げない。

乱暴な言葉を使わないし、当然ひわいな言葉も使わない。

あくまでおっとり穏和でしとやかに、優しい口調で一刀両断。

りいこの周囲の空気は特別だ。

神聖で近寄り難いオーラに満ちている。

黙っている日本人形のように美しく整った顔と姿。

つややかで見事な、胸の先に届くか届かないくらいの長さで切り揃えられた、真っ直ぐな黒髪。

立つ姿、座る姿、歩く姿も、走る姿も、美しく優雅で凛としていて華がある。

何故こんな田舎の公立中学校になどいるのだろうと思ってしまいが、理由は単純だ。

『私立へ通うと片道だけで一時間半はかかりますから』

それなら寮に入るか一人暮らしするという選択肢もあるのだが、それでは習い事に通えなくなる。

だから、近くの公立へ通うのだ。

田舎だからこそその事情である。

あたしとりいこが出会えたのは、共にそんな田舎の同じ学区内にたまたま生活していたからだ。

だけど、それは単なる偶然だけど、神の采配にも思える。

あたしは基本的に物怖じしない。

度胸だけは人一倍。

りいこはとても素敵な女の子だけど、生半可な女の子では立ち打ちできない。

臆してしまったり気を吞まれたり、場合によっては怖いと思ってしまうかもしれない。

りいこは度量が広い。

肝も据わっている。

それにとっても優しい。

だけと思う。

こんな女の子と対等にガチで腹を割って遺憾なく話せて付き合えるって、あたしを外したら、そうそう滅多にいないくない？

あたし、調子に乗ってるかな。

だけと思う。

あたしにとつてりいこは最高の親友だけど、りいこにとつてもあたしは最高の親友だよな？

だってあたしという時のりいこはキラキラしてる。

生き生き伸びやかにリラックスしてる。

きつとあたしとりいこは、ベターハーフ。

半身なの。

恋人とかじゃないけど、魂の伴侶。

互いに支え合えるぴったりの相棒で片割れなの。

あたしはそうだと思いたい。

ランニングから帰ったら、制服や下着の替えなどを持って、シャワーを浴びる。

あたしの髪は、毛先がわりとはねやすいから、寝癖も直せて一石二鳥。

校内でのあたしは完璧な王子様だから、身だしなみには気を遣うの。

だったら朝一番に寝癖を直せ？

だってどうせ汗やら何やらで汚れて乱れるんだもの。

気にしてたら胃が痛くなっちゃうじゃない。

ま、単に面倒臭がりなだけだけど。

シャワーで顔や体や髪を洗い、タオルで水気を拭って服を着る。

きちんとドライヤーでブラッシングと乾燥させて。

ワックスで毛先軽く整えて、前髪だけ軽くムースを付けて、立ち上げる。

化粧とかはしない。

ニキビとか出ないように、甘い物はなるべく控えめ。
食べ物も気をつけ、野菜を多めに取ってる。

筋肉とかつきたいから、肉もしっかり食べてるけど。

何なの、この薄い上腕、肩の肉。

胸だっけいつまで経ってもふくらまないし。

それに何より致命的なのが、初潮がまだないってこと。

まあ、おかげで生理痛とは無縁だから、部活や体育は休まずに済むけど。

だけどたまに自信なくなる。

あたし、本当に女の子？

お母さんは『心配しなくても、私は中学二年生までなかったから』らしいから、遺伝なのかも。

うちの両親は美男美女だ。

共働き。

お父さんはディーラー、お母さんは看護婦。

二人とも土日や祝日も忙しい。

食事は基本的にお母さんが用意してくれるけど、自分達で作る事もある。

あたしが小学校高学年になったくらいから、朝食はあたしと兄貴が交代で作る。

今日は兄貴の当番だけど。

「……まだ寝てる」

どうしようかと一瞬悩む。

いつもならば、問答無用で叩き起こす。

布団の上から飛び蹴りだ。

そうでもしないと、ヤツは起きない。

だが、昨日の記憶がまだ鮮明なあたしは、いつも通りで良いのか少し悩んでいる。

一分くらい考えて、心を決めた。

まあ、良い。

相手はバカ兄、変態工口兄だ。

細かい事は気にしない。

とりあえず油断しないで行けば良い。

バカ兄はどうも目覚まし時計をインテリアだと思っているか、たまに珍しくセツトしても、使い慣れていないせいかな、単に寝起きが悪いだけか、鳴っても止めてまた寝ている。

たまに投げつけて壊す事もあるし、ゴミ箱にクッションと共に詰め込まれていた事もある。

自力で起きることはまれだ。

夜遅くまで起きている事が多いみたいだから、当然だとも言えるが。

とにかく寝起きの兄は最悪だ。

一応念のため、兄が以前修学旅行の土産と称して買ってきてくれた木刀を握る。

兄が何を思っでこれを選んだか、理解不能だが、あたしはこの木刀を兄にしか使った事がない気がする。

もちろん木刀は人に対して使うべきではない。

さすがに直撃させた事はないが、枕や布団を一時的に陥没させるのに使っている。

こいつを使い始めて一年半近く経つが、だいぶ手に馴染んできたと思う。

いきなり飛び蹴りはやめよう。

罾を張られていたら、防御が難しい。

あたしは木刀を構えながら、慎重にゆっくりと、兄の寝室のドアを開けた。

「……サトちゃん、何やってんの？」

ドアのすぐ向こうに立っていた兄が、不思議そうに首を傾げ、あたしの右手の木刀に気付いて、ハッと顔を強張らせる。

「サ、サトちゃん、まさか……っ！」

あたしは慌てた。

う、嘘だ。

兄貴が自力で起きている。

逢い引きでもなく、遊びに行くためでもなく、修学旅行でも、体育祭でも文化祭でも何でも無い平日なのに。

おかしい。

そんなはずはない。

あたしは、息を静かに吐きながら、木刀を両手で握って正眼に構えた。

「は、ちよつ、サトちゃん!？」

兄との距離は、あたしの歩幅で五、六歩だ。
少し近すぎる。

問答無用で攻撃する気はない。

だが、少しでも怪しい素振りを見せたなら、速攻で決める。

「待って、サトちゃん。それ、武器が竹刀でも十分危険だけど、それより硬くて重い木刀じゃマジで死ぬから!」

「来ないで!」

近寄ろうとする兄に言い放つ。

「いや、ほら、サトちゃん。俺、今朝、食事当番だから。それに学校行かないと」

兄が何の理由も目的もなしに、自発的に起きるはずがない。

「……何を企んでいるの?」

「は!？ え、ちよつとサトちゃん。俺はサトちゃんの脳内で、どれだけ腹黒鬼畜キャラに設定されてるの!? それとも昨日のことをまだ寝に持つてる!？」

兄は焦った顔であたしを見つめている。

あたしは何を言われても油断はしない。

兄が事を起こす気ならば、加減も躊躇も遠慮もなしに、渾身の力で持って叩き伏せる。

この戦い、決して負けるわけに行かないのだ。

「悪かった! 本当に俺が悪かった!!! ごめん!!! 謝る!!!」

謝るから！！ だからサトちゃん、お願い許して！！ 二度とサトちゃんの顔を殴ったりしないから！！ 本当ごめん！！ 土下座する！！」

そう憐れみを誘おうと言わんばかりの声で叫びながら、兄は床にひざまずき、両手について土下座する。

「両手を上げる」

「……銀行強盗？」

兄は顔を引き攣らせた。

「どうでも良いからとにかく上げる」

兄はあたしの言葉に従った。

「そのまま動くな」

「はい、動きません」

「喋るな」

そう言うのと、兄は黙り込んで、不安げにあたしを見た。

あたしは木刀を構えたまま、ゆっくりと歩を詰める。

途中、木刀の切っ先を兄の喉へと向け、ゆっくり慎重に回り込んで背後に立つ。

兄はごくりと息を呑む。

あたしは喉元に右手一本で木刀を突きつけながら、背後から左手で、兄の身体を探る。

武器や危険物を所持していないか、丹念にポケットを探り、確認する。

しかし。

「……ない」

何処にもない。

おかしい。

そんなはずがない。

「……サ、サトちゃん」

「黙れ」

「いや、ごめん。緊急事態だから！ た、頼む！！ トイレに行か

せて！！ も、漏れちゃうから！！」

あたしは顔をしかめた。

本当ならば大変だ。

兄が漏らすところなど見たくない。

「何処に隠してある？」

「え、は？ 何を！」

「武器や危険物」

「ある意味ビッグでマグナムな危険なブツは持つてるけど、取り外しはきかないから！！ そんなに器用じゃないから！！」

この期に及んでまだ冗談が言えるらしい。

「ぎゃああつ！ 木刀当たってる、当たってるよ！！ メチャクチャ怖いよ、サトちゃん！！ ちびっちゃうよ！！ は、早く解放してっ」

切羽詰まった悲鳴を上げる。

その顔を間近で見つめて、その恐怖と狼狽が偽物ではないことを確認してから、木刀をそらし、腕を下ろした。

兄は一目散に駆け出した。

二階にもトイレはあるのに、慌てていたのか、転がり落ちそうになりながら階下へ降りる兄を見送った。

「嘘じゃなかったみたい」

悪い事をしただろうか。

あたしは木刀を片付け、カバンとスポーツバッグと携帯を持って、階下へ降りた。

第4話 朝の風景（後書き）

というわけで怜子の朝と兄の不運または災難話。

あくまで怜子は真面目です。

ふざけた話ですみません。

今更ですが、木刀は人にも物にもその他にも使わないようにしましょう。

危険です。

ちなみに私が十代の頃、玄関のスリッパ立て付近に木刀がありました（何故かは覚えていない）。

第5話 本音と鬱屈

バカ兄は、あたしより料理がうまい。

「料理のコツは、ちよつとした気配りと愛情だよ、サトちゃん」

兄貴にだけは言われたくない。

「例えば調理後の状態をイメージした上で食べやすい大きさに食材を切るとか、手間を惜しまず作業するとか。柔らかくて舌ざわりの良いスクランブルエッグを作るためには、程よく均一に黄身と白身が混ざっていて、フライパンの上では手早く優しく掻き混ぜて。サトちゃんには、イメージと配慮と愛情が足りないよ。そんな男前で不器用なところも可愛いけど……ウゴフォゴツ！」

みぞおちにストレートを入れてやった。

なんだか悔しい。

すごく悔しい。

人間としての尊厳を傷付けられ、否定された気分だ。

「……そんなドSでシャイなサトちゃんも大好きさ……」

変態兄は無視しよう。

あたしの心の平穏のために。

兄がろくな事を言わないのは、今に始まった事じゃないし。

二言めにはセクハラ、エロ変態な台詞が出る。

発言・行動がいちいちいやらしい。

天然ならばただの変態、計算ならば極悪最低鬼畜大魔人だ。

もしくは悪の帝王。

いや、悪の帝王というよりエロ変態王？

……まあ、良い。

兄がエロで変態でバカなのは単なる事実だ。

今更わざわざ確認する必要はない。

「ごちそうさま」

「弁当あるよ、サトちゃん。お兄ちゃんの愛情たっぷり手作り弁当

だよ。二人分作ったから、是非りいちゃんと一緒に……ヒゲブアッ！」

顔面にフックを叩き込む。

「いない」

そう言つて立ち上がると、兄は涙目であたしを見上げる。

「何がそんなに気に入らないの？」

それくらい判らないのか、エロ変態兄。

「自分の過去の所業を振り返ってみろ」

厳しく冷淡に言い放つ。

「だから、今回は本気だつて。俺はりいちゃんが本気で好きなの。だつてりいちゃんみたいな女の子、他にいないじゃない」

りいこが唯一無二の存在だというのは同感だ。

だが、だからといって兄がちょっかい出して良いわけじゃない。

「りいこは迷惑なの」

あたしはキツパリ言つた。

「りいこは兄貴に全然興味ないの。平凡で退屈でつまらない、薄っぺらで無個性だつて言つてたよ」

「……うわ、そりゃキツイな」

さすがの兄も苦笑して言つた。

「りいこちゃんはどうな男が好きなの？」

「迷惑だつて言つてんのが判んないわけ、バカエロ変態ボケ兄」

「変態ボケはやめてくれないか。まるで俺が変態好きあるいは変態ブレイ好きに聞こえるじゃないか」

そんなエロ方向に歪んだ曲解する変態は、キサマだけだ！

思わず手が出るが、兄は上体をそらして避ける。

「アハハーン、そんなチヨロイ攻撃俺に当たるはずが……が……？」

しかし、椅子に座ったままだったので、ガツタンと音を立てて、

椅子ごと倒れる。

「ウオアッ！」

やはりバカだ。

「行つてきます」

カバンを手に背を向ける。

「うあ、痛。後頭部と背中打ったよ。……てか、置いてかないでよ、サトちゃん、プリーズ」

あたしの朝は忙しいのだ。

朝練のために、早めに登校する。

整髪剤とデオドラントと鏡と櫛と歯ブラシ・洗顔セットとタオルは必携。

自然大荷物になるそれらは、スポーツバッグに入れる。

あたしは不要な時はみだりに走らない。

だから余裕を持って行動する。

「おはよう、高島さん」

「おはようございます、れー様」

「おはよう、れーちゃん」

「おはよう。天気良いね」

につこり完璧キラキラ王子様な笑顔で優しく微笑む。

王子様は皆に平等に振る舞う。

特別なのはごく少数の友人だけ。

だけど大勢の前でおおっぴらに親しげには振る舞わない。

『疲れるでしょう？』

りいこは言う。

『怜子がそんなに無理をする必要はありませんよ』

だけど、これはたぶん義務なの。

バカな兄を持ってしまった妹の責任なの。

兄の所業を止められない、悪行を改めさせられない。

だったら、兄の対抗馬になる。

兄のライバルになって被害を少しでも減らして、邪魔して、気付かせたい。

高校生になったら、また更に手がつけられない男になるだろう。

兄はバカで遊んでばかりいるくせに学業成績は良い。

推薦入試で進学校に行けるだろう。

あたしはバスケ以外に取り柄がない。

そのバスケだって貧弱な体格が悩みで、今一つ。

卒業までにはマシになるだろうけど、ひたすら努力が必要だ。

兄が男子高に進学してくれば少しは不安はマシになるが、あの男が好んで女の子のいない場所に行きたがるとは思えない。

ここ一年、いや半年が勝負だ。

その間に兄を凹ましてやる。

その天狗の鼻を折ってやる。

悔い改め、反省させる。

難しいだろうけど、やってやる。

女癖の悪さとバカとエロと変態さえなければ、兄はそう悪い男ではないはずだ。

品行方正で完璧な兄など想像もつかないが、少なくとも女の子を無意味に泣かせるような男は許し難い。

存在を抹消させるか、改善して欲しい。

なるべくならば、嫌いになりたくないし、憎みたくない。

なんだか色々悔しくて腹が立って仕方ない。

ちよつと違えば、きつと自慢の兄貴だったはずなのに。

どこで間違っただろう。

何がおかしくてああなっただろう。

それとも元からああいふキャラなわけ？

思春期だから色々悩みはあるけれど、あたしの最大の悩みは変態

エロ兄だ。

いくらシバイても罵倒しても、全然足りない。

しかも全く効いてない。

何なの、あれ。

なんで実の妹にあれだけ言われてやられて、平気なの。

平然としてるの。

信じられない。

理解し難い。

あたしは内面の苛立ちを抑えきれない。

なんでちつとも判ってくれないのよ。

なんで女の子の気持ち理解してくれないのよ。

バカ兄、エロ兄、変態兄。

デリカシー皆無のヒトデナシ。

いつか女に刺されて死んじゃえ。

でなきゃあたしが脳天叩き割ってやる。

嫌い。

嫌い。

大嫌い。

チャランポランでいい加減。

なんでも適当、手抜きしまくり。

ほとんど滅多に本気を出さず、いつもふざけてケロッとしてる。

本気になれば、たぶんバスケだってあたしより上手いはずなのに、肝心なところで気を抜くから、相手がいるスポーツは全てダメ。

わざとなのか、やる気がないのか、対面した途端に集中力をなくしてしまう。

時折わざと相手に勝ちを譲ってるんじゃないかと邪推してしまう。

兄が何を考えているのか、何が楽しくて生きているのか、本当に判らない。

時々思う。

兄貴はいつも笑っているけど、本気で笑ってることなど皆無なんじゃないかって。

本当は退屈していて、気力皆無で、あたしを含めて、誰にも何にも興味ないんじゃないかって。

笑ってるけど、本当は全部嘘なんじゃないかって。

あたしは時折、兄貴が恐い。

何かをやらかしそうで、何かの原因になりそうで。

あたしの世界を、あたしの大切なものを、跡形なく破壊し尽

くしてしまいそうで。 だから、あたしはとても恐い。

兄貴は笑っているけど、とても恐い。

あたしは兄貴が何を考えているのか知りたい。

兄にもし悩みや鬱屈があるというなら、とても知りたい。

兄に近付き、対等の立場で、腹を割って話をしたい。

ふざけていない本気の本音の兄と、心から会話したい。

そう思う。

生徒玄関で靴を脱いで、履き替える。

下駄箱に手紙が入っていた。

良くある事だ。

差出人は女の子。

とりあえずカバンにしまう。

朝練終了後か、シヨートホームの時にでも読む事にする。

それがあたしの習慣だ。

「怜子はもっと自分に素直に、自由に生きるべきですわ。 だから、時折疲れたり苛々してしまうんです。 無理は禁物ですよ」

りいこが言った。

「そりゃ、判ってるんだけど。 兄貴みたいの間近に見てると、あたしがこんな連中から守ってあげなきゃ、誰が代わりに守ってくれるのとかって思っちゃって」

あたしが言い訳すると、りいこは真剣な表情になる。

「都合の良い偶像になって、自分を押し殺して青春無駄にするなんて、愚の骨頂ですわ。 怜子はもっと青春を、人生を謳歌しなくては。 『命短し恋せよ少女』^{おとめ}です」

「あはっ、ゴンドラの歌？」

クスクスと笑った。

「だけど、あたしの容姿じゃ相手がいないくない？」

「大丈夫です。 心配いりません。 怜子は十分魅力的です。 それが判

らない男は、見る目がないのだから、そんな無粋な連中をわざわざ
怜子が相手にする必要はありませんわ」

ニッコリ優しくとやかに微笑む。

「……有り難う、りいこ」

目が潤んでしまうのは、親友の言葉に感動したというよりは、その
オーラと美しさが眩し過ぎたからだと思う。

ああ、あたし、本当にちゃんといつか恋することができのかし
ら。

世の中兄貴みたいな変態ばかりじゃない筈だけど、時折自信をな
くしてしまう。

女の子を見て眩しく麗しくてウルウルするなんてのは、りいこ限
定なのだけど、あたし本当ヤバくない？

なんか色々終わってない？

マジに何か間違ってる？

あたしは真性レズじゃない筈なのに。

りいこを見ると、自信がなくなる。

ああ、恋愛の神様。

あなたがこの世に存在するのなら、いつかあたしに真実の恋をさせ
てください。

初キスが同性——しかも好きでもない相手に、無理矢理奪われた
——っただけで十分凹むのに、初恋も初エッチも同性じゃ悲しすぎ
る。

だってあたしはレズじゃないもの。

だけど、誰も信じてくれない気もする。

でもね、男だろうと女だろうと、本当に美しい人って、見ただけ
で激しく心が揺さぶられるの。

そしてあたしはりいこほど美しい人を、知らないわけ。

だから、これは決して恋じゃない。

だけど大事な親友を変態兄貴の毒牙にかけるなんて事は、絶対に
許せない。

最悪、殺してだって、阻止してやる。

これは友情。

あくまで熱く深い友情よ。

ええ、勿論そうなんだから。

だから、あたしを変態扱いしないでちょうだい。

ただ、あたしにとつてりいは唯一無二の親友なんだから。

あたしはりいが心底好きだ。

だけど、兄貴とりいを取り合う気など更々ないし、彼女と愛し合いたいわけじゃない。

男にはなかなか判って貰えない感覚だと思う。

だけどきつと、同じ女の子には判って貰えるはず。

あたしはりいを自分のものにしたいわけじゃない。

決して独占したいわけじゃない。

ただ、りいこにはこのまま今のままで、自由に闊達で明るく真っ直ぐなままでいて欲しいの。

女の子は、男に恋をすると変わってしまう。

この世の全ての女の子がそうだというわけではないけど、兄のようなロクデナシに、本気で惚れてしまった女の子は、大抵変わってしまう。

恋した女の子は、盲目的だ。

自分の信じたい事しか信じない。

いとも簡単に男の戯言、軽い言葉を、信じてしまう。

あたしが兄貴だけはやめた方が言っても、聞いてはくれない。

あたしが彼女を思ってた言ってるのではなく、兄を独占したく言っていると思われてしまう。

拳句の果てに、兄に冷淡にされると兄を恨むのではなく、あたしが兄に何かを吹き込んだと思われたりする。

あたしがそうじゃないと否定しても、友達とは皆離れていつてしまった。

誰もあたしを信じてくれなかった。

あたしのそばにいてくれなかった。

事情を知っている子は、一人二人と離れていった。

『怜子が悪いわけじゃないよ』

そう言ってくれた子まで。

『だって、明史さんが恐いから』

『怜子と一緒にいるとばつちり受けそうだから』

最初の内はちよっぴり泣いたりしたけれど、ある日ふと思ったの。泣いて哀しがったり、悔しがったり、淋しがたりしても、何も解決しないし、誰も何も助けてくれない。

誰も何もあてにならないなら、誰も助けてくれない、誰も兄を止めてくれないなら、あたしが全部やれば良いじゃない。

メソメソウジウジする暇があるのなら、その分懸命に努力すれば良い。

覚悟を決めたら、目標・目的定めてGo！

グダグダウダウダ、悩むな、あたし。

愚痴を言う暇と余裕あるなら、努力し研究しろ。

同じ女の子の気持ち理解できるのは、同性の強み。

あたしがされて嬉しい事を他人にする。

誰かが喜んでくれる事を皆にする。

その内、なんだか演技と本音の自分の境目がおかしくなって、だんだん混じってきてしまったけど。

いいこと出会って、ぶっちゃけ話ができるようになってから、少し楽になった。

息抜きできるように、気が抜けるように、愚痴や弱音を言えるようになったから。

偽物王子なあたしと、本物のあたし。

どちらも自然に出せるようになってから、スイッチの切り替えも上手くできるようになった。

だけど、時折混じる。

だから時折、自信がなくなる。

あたし、本当に女の子？

身体は女になりきれてないし、心も女になりきれてない。

男でも女でも中性でもない、半端な生き物。

あたしは恋をしていない。

恋愛を夢見る事も、恋愛に夢を抱く事もできない。

あたしは恋に失望している。

あたしは情欲の絡んだ愛を、見返りを求める愛を疑っている。

男の子に興味がないわけじゃない。

けどあたしは、恋愛を、異性を、いまいち信用しきれない。

それが人の心を救ったり、癒したりするなんて嘘じゃないかと思ってる。

純愛なんて、存在しないんじゃないかと疑っている。

兄が、この世の全ての基準じゃないと知っている。

あれはひどく極端で、異常で過剰な存在なのだ。

現にあたしの知る限り、兄のような性格、兄のような言動をする人間を、男でも女でも他に知らない。

兄はあらゆる意味で特別だ。

決して、全ての基準じゃない。

あたしは自分が完璧じゃない事を良く知っている。

あたしと兄は髪型以外は、そっくりだと言われる。

あたしは兄のミニチュア版だと言われる事もある。

けどあたしと兄は、別人だ。

あたしは絶対にミニチュアじゃない。

あたしが兄に勝ちたいのは、あたし自身のためでもある。

あたしは兄に勝つことで、自分に自信を持ちたいのだ。

あたしは安心したいのだ。

手加減されて勝ちたくない。

本気の兄とやり合って勝たなくては意味がない。

あたしはあたしを救うために、兄の暴走を止めるために、兄の被害を最小限に抑えるために、兄を倒したいと望むのだ。

たぶんあたしは自分勝手な人間だ。
独善的で我儘だ。

それでもあたしはやめられない。
兄を本気でギャフンと言わせたい。
ポーカ―フェイスを崩してやりたい。
たぶんそれは可能はずなのだ。

兄は完璧な人間ではない。

あたしがそうではないように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0274c/>

あたしは偽者王子様

2011年9月4日21時59分発行